

「狂言」学習についての一つの試み

——舞台「瓜盗人」の録画を使って——

藤 原 敏 夫

はじめに

教室での「狂言」学習において、もどかしさを感じることも多い。それは、せりふとしぐさの劇である「狂言」を文字（台本）をよむだけで味わおうとし、「狂言」が本質的にもっている舞台芸能としてのよさを見のがしているのが、その一因ではないだろうか。

そこで、「狂言」の舞台をビデオテープに収めたものを、補助的に利用するのではなく、中心にすえた学習を考え、舞台（録画）が、生徒の心にどのようにひびき、台本をよむこととはちがってどのようにとらえられるだろうかということをさぐるささやかな試みである。

教材観、授業の方法など、不十分なままの実践報告である。諸先生方の御批判、御指導を仰ぎたい。

授業の実際

(1)指導計画

①実施 昭和五五年二月

②対象 中学校一年生

現在使用している教科書は、学校図書版「中学校図

(2)学習経過

①一学年三クラスを対象とする。

(i) A・Cクラス（A——語釈つきの台本、C——語釈なしの台本）

語一」である。所収の古典教材は「川柳・俳句・狂言、説話」であり、狂言は「雷」（「神鳴」）の一部が載っている。

③時間 二〜三単位時間

④教材

。大蔵流狂言「瓜盗人」（シテ 男 木村正雄、アド 耕作人 網谷正美）。神戸市湊川神社能楽殿で上演されたものを、出かけていってビデオテープに収録したもの。（約三〇分間）「狂言」の生の舞台にふれることを第一に考え、それに準じたものとして位置づける。

。岩波書店の日本古典文学大系「狂言集下」の中の「瓜盗人」と、能舞台略図をプリントしたもの。大蔵流の山本東の書写した本を底本としている為、舞台とはわずかな言いまわしのちがいの他、ほとんど差はない。いずれも「瓜盗人」全てを学習するものとする。

第一時 台本をよんだあと、感想とあらすじをかく。
 第二時 台本をよみながら、おもしろいところ、わからないところを抜き出す。

第三時 録画をみながら、おもしろいところ、わからないところをメモし、その後、よむ場合とみる場合とのちがいにについて感じたことをかく。

(ii) Bクラス

第一時 事前学習なしで録画をみながら、おもしろいところ、わからないところをメモし、あとで感想とあらすじをかく。

第二時 語積つきの台本をよんで、よむ場合とみる場合とのちがいにについて感じたことをかく。

② A・B・Cクラスとも、舞台の録画をみている生徒の反応を録画する。

(3) 学習の結果

① あらすじの把握

内容	クラス		
	A (40名)	C (41名)	B (40名)
完全なもの	27	28	31
「祭礼のけいこ」の部にふれていないもの	13	13	9

いずれのクラスも狂言「瓜盗人」にはじめてふれた時のあらすじである。

表II ② おもしろかったところの指摘状況

舞台での場面	クラス			備考
	A (40名)	C (41名)	B (40名)	
1 耕作人が垣を結う場面(グイグイ・ズブズブ・ヤットナの音を伴う)	0	0	0	台本では「エイエイ」の音のみ
2 かかしの面のおもしろさ	0	0	17	舞台のみ
3 瓜盗人が垣をとびこえる場面(エイエイヤットナの音を伴う)	1	0	11	
4 瓜盗人が夜、瓜をとろうとして枯葉ばかりをとる場面(バサバサの音を伴う)	11	9	23	台本には「バサバサ」の音はない

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※											※						
計	その他	内容									計	その他	自分の想像がひとりよがりではないかという不安がつきまとう	自分で場面を想像してよめるのでたのしい	しぐさ、いいまわしがないので、おもしろさが少ない		
		狂言はむずかしいというイメージをもっていたが、かたくしるしくなくて意外にやさしくおもしろい	口調がわかり、ことばが生きてくる。味があり、動作をあらわす音の言うのがおもしろい	なんにも装置のない舞台でそれらしく演じるのはすばらしい	くり返しの動作・ことばが多くてしるけるが、逆におもしろさがでてくる	しぐさがつけ加わることにより、ことばのしみもわかりやすくなる	あり迫力がでてくる。新鮮さが感じられ、場面が強く心にのこる	ことばのききとりにくい面も出てくる	その他	み						る	学
102	9	14	5	28	18	1	8	8	17	3	A	14	0	1	1	2	5
120	22	27	7	17	24	3	9	12	10	11	B	34	0	2	2	2	9
135	31	33	4	19	31	10	7	3	21	7	C	13	0	1	3	3	0

欄外に※のついた項目は、それぞれの学習におけるプラス面である。

「その他」の欄の（ ）の数字は、それぞれの学習において、プラス面を指摘していた数である。

(4) 集計表より

① 内容のおおまかな把握について

表一にあるように、「瓜盗人」のストーリーのなかで一番わかりにくいと思われる「瓜盗人がかかしを相手に祭礼のけいこをする場面」にふれているかいないかによって、あらすじを把握しているかどうかはほぼ判断できる。結果は、よむ学習の場合もみる学習の場合もほとんど差はない。むしろみる学習の方がしつかり内容をとらえているようである。次にそれぞれの学習の場合の生徒のかいたあらすじを示す。

(よむ学習の生徒)

ある耕作人がうりをつくっていたが、ある夜うりを盗まれてしまった。耕作人はかかしをつくっておき、かきねをつくっておいた。

その夜、同じ盗人がうりを盗みにきたが、かかしに驚いて腰をぬかしてしまふ。しかし、話しかけてもものをいわないので、かかしと気付き、おこってうりをとり、かきねを倒し、うりづるをひっこぬいておいた。次の日、耕作人はうりの様子を見て驚き、盗人をつかまえるために自分でかかしになった。その夜、また同じ盗人がうりを盗みにやってきたが、うり畑が荒れたままになっている。てっきり耕作人は気づいていないのだと思つた盗人は、耕作人がばげているかかしの前で、祭のだしものの練習をはじめた。耕作人は時をみ

てかかしの服をぬぎ、盗人を杖でたたき、盗人はびっくりして逃げていき、耕作人はその後を追いかけた。

(みる学習の生徒)

ある日、瓜畑のみまわりに行った耕作人は瓜が盗まれていることに気づいた。腹をたてた耕作人は瓜盗人をこらしめるために、かかしをつくり、さくをつくって瓜もかくした。その晩も瓜盗人がきた。瓜盗人というのは、実はさる人につかえている男で、盗んだ瓜を主人に献上したところが、主人はもう一つ二つ欲しいという。そんなわけで又、盗みにきたのだった。さて、瓜盗人、さくをとびこえ、かくれた瓜をゴロゴロ転がって捜していた。ところが、ふと見ると人影が……。瓜盗人、大あわてで平謝りに謝ったがなぜか返事がない。なんだ、よく見るとかかしである。瓜盗人は腹をたてて瓜のつるをちぎり、さくをこわして、瓜をふところに逃げていく。次の日、耕作人はめちやめちやにされた瓜畑を見、驚き、怒る。そして瓜盗人をこらしめるため、自分がかかしになって瓜盗人を待つ。はたして、その晩も瓜盗人は、主人に「もう一つ二つ出せ。」と言われて盗みにくる。そして畑がめちやめちやのままなのを見て、まだ耕作人は気づいていないと喜ぶ。それからこの前ひどいめにあわされたかかしを相手に祭りのけいこをはじめ、いい気分になる。さあ、そこで耕作人、今だ、とばかりに姿を現した。瓜盗人はおどろいて逃げ出す。耕作人追いかける。「やるまいぞ、やるまいぞ。」

みる学習の生徒の方は、舞台の進行を生き生きと描き出している。

②生徒がおもしろさを感じた場面について

(i) 表Ⅱをみる場合、語釈なしではじめて狂言にふれたという条件を考えれば、Cクラス(よむ学習)とBクラス(みる学習)とを比べるのがよいと思われる。指摘した総数でみると、Bクラスのみる学習は、Cクラスのみる学習の一・五倍強である。また同じCクラスの中では、みる学習はよむ学習の二倍弱と多い。Aクラスにも同様の傾向がある。つまり、みる学習の方がおもしろさを多く感じとっていることになる。

(ii) 次に細部に目をむけてみる。

。みる学習の方がよりおもしろさを強く感じている場面は、1、耕作人が垣を結ぶ場面、2、かかしの面、3、瓜盗人が垣をとびこえる場面、4、瓜盗人が夜、瓜をとろうとして枯葉ばかりをとる場面、5、瓜盗人がごろびをうって瓜をとる場面、8、かかしだとわかって瓜盗人が腹をたてる場面、9、瓜盗人が去る時に垣をこわし、瓜づるをひきぬく場面、11、かかし(耕作人)が瓜盗人に気づかれないうちに首を動かす場面、12、瓜盗人が頭をうしろからかかし(耕作人)にたたかれておどろく場面、である。このうち、2と11の場面は舞台(録画)をみなければおもしろさは出てきやうがないものである。残りの各場面はいずれも擬態語・擬声語、しぐさが加わったために、おもしろさがいっそう強く感じられたものと考えられる。

。よむ学習・みる学習ともに同じ程度おもしろいと感じて

いる場面は、7、瓜盗人がかかしを見て人間だと思い、本
気であやまる場面、10、瓜盗人が畑でかかし（耕作人）を
相手に祭礼のけいこをする場面、である。

よむ学習の方がよりおもしろさを感じている場面は、6、
「まくわ瓜でなくてまくら瓜」という言い方、13、瓜盗
人がつなを引いたりゆるめたりしている場面、である。6
は、よむ学習では、しゃれだとわかりやすいが、みる学習
では、ききとれなかつたり、ことばがわからなかつたりす
ることがあると思われる。またこの部分には特にめだつし
ぐさが含まれていないことも、みる学習におもしろさの少
ない一因であろう。13の場面は、みる学習のBクラスにだ
け、おもしろいと感じている生徒の数が少ない。台本にだ
け「面白い」のせりふがくり返し出ることがいくらか
影響しているかもしれないが、その理由ははっきりしな
い。

③生徒がわからなかったと指摘したことについて

表ⅢのCクラス（よむ学習）とBクラス（みる学習）を総数
で比べてみると、六七八と一〇九で、よむ学習の方が、六倍強
と非常に多い。Cクラスに比べてAクラス（よむ学習）で、こ
とばの意味の不明なものが少ないのは、あらかじめ語釈を
示していたためで、当然のことである。よむ↓みるの変化を
総数でみると、Aクラス 一七五↓三一、Cクラス 六七八↓
六六とそれぞれ激減している。その内訳は、内容についての不
明なことの数ほとんど変化はなく、ことばの意味の不明なも

の数が著しく減っている。これは、録画をみることによって
ことばの意味が理解できたためではなく、みる学習において
は、ことばの抵抗がほとんど気にならなくなるとみるべきであ
ろう。ちなみに、Bクラス（みる学習）の生徒四〇名のうち二
〇名は、ことばの意味がわからないことを指摘していない。ま
た、みる学習において、Aクラスは四〇名中二一名が、Cクラ
スは四一名中一七名が、わからないところを全く指摘していな
い。

内容についてのわからないことの指摘数は、よむ学習みる学
習とも差はないし、指摘している項目についても大きなかたよ
りはない。「なぜ……」という疑問の形が多く、舞台、出演者
の服装などにふれているものもいた。

④よむ学習とみる学習とのちがいについて

表Ⅳにより、よむ学習とみる学習とを比べると、みる学習の
プラス面を指摘している総数三二九、よむ学習のプラス面を指
摘している総数二八で、圧倒的にみる学習の支持が強い。みる
学習では、ことばの言いまわしとしぐさが加わることに、よ
む学習に比べて、おもしろさ、たのしさをより多く味わうこ
とができ、それがことばのわかりにくさを補ってくれていると
とらえている。

一方、よむ学習では、文字でかかれたものは安心してよめる
し、くり返しよむことができるかと評価している。自分で場面を
想像しながらよむことができるということについては、賛否両
論が出ている。

かわったところでは、現代の映像情報化社会に育った生徒らしく、みる学習の方が楽だという感想をもつ者もいた。

(5) 授業を終えて

「狂言」におけるみる学習の意義は、ことばそのもののもつ抵抗をとりのぞいて、みるものを舞台(録画)にひきこむことができることであろう。舞台で演じられる「狂言」のもつエネルギー(「生命」)にふれることができ、文字(台本)をよむだけでは、とても得ることのできないものを感じるができるのである。舞台(録画)の演者のせりふの言いまわしとしくさの一つ一つに心を躍らせ、笑いをこぼしている生徒の姿がすべてを語っているといえよう。

今回、予想外の時間と労力を費したのは教材作成であった。中学校一年生を対象とし、できるだけ生の舞台に近いもので、作品を通して学習することを考えると、教材の選択範囲は限られてくる。加えて著作権等の問題で、舞台を収録したビデオテープを使うとなるといっそうむずかしくなる。結局、神戸市の、能楽センターと上田能楽堂の上田照也先生の御好意で、舞台をビデオテープに収めさせていただいた次第で、この間、約六ヶ月を要した。今後、学校教育の場で使う教材の作成、利用について、もっと道が開かれることを希望する。

この試みでは、よむ学習とみる学習との差がどのようなものであるのかということの報告に終わってしまい、録画をみている生徒のじかの反応の分析、生の舞台をみた場合と録画をみた場合との生徒の反応の比較、よむ学習とみる学習とを組み合わせた効果

的な学習方法をさぐること等、残された課題は多い。

おわりに

できるだけ生の舞台に近いものを授業の中にとり入れたいという気持ではじめて試みであったが、結論めいたものはなく、ますます行く先遠しの感がしている。ただ、生徒の反応は予想以上に肯定的で、いくらかはっとしている。今後、もささやかな歩みをつづけた(本学附属福山中・高等学校教諭)